

海藻とは「海中に生育する藻類の仲間」で、主として緑藻類、褐藻類、紅藻類の三大グループからなる。形態的には植物に見られるような根、茎、葉の区別がないものが多く、根のように見える付着器は岩や砂礫に固着する働きが主である。栄養は葉状の体全体で光合成によって吸収する。肉眼的には大型の底生海産藻類であり、顕微鏡で見ると極小さい藻類は除外している。一方、海中には植物によく似た根、茎、葉の区別がある「海草」と称するアマモの仲間が生育しており、根は砂泥の中に伸長して土中の栄養を吸収、葉からも光合成で栄養を吸収する。岩礁域に生育するものと砂泥域に生育するものがあるが、これらは分類学的に維管束植物で扱われているので、本分類群では除く。

日本の沿岸域には約1500種類の海藻類が生育しているが、海藻の地理的分布は沿岸を流れる海流の影響を強く受ける。寒流の流れる北海道ではコンブなど亜寒帯性海藻が、黒潮暖流の影響が強い南西諸島ではカサノリ、ガラガラ類などのいわゆる亜熱帯性海藻が生育している。これらの中間に位置する本州沿岸では暖流と寒流の両方の影響を受けてカジメやヒジキなどの温帯性海藻が生育している。本州の日本海側は太平洋側の海藻相に似ているが、干満の差が少なく冬場の潮位が年間を通して一番低いことなど、潮間帯の海藻植生は貧弱なのが特徴である。

本県沿岸域の海藻植生は対馬暖流の影響を強く受け、主に暖温帯性の海藻が生育し、一部に熱帯・亜熱帯性の海藻も分布する。海水の透明度が高い事もあって光合成活動に適しており、かなりの水深まで海藻類が豊富に繁茂している。特に、島根半島や隠岐諸島の外洋に面した岩礁部海底にはアラメ場と称する褐藻類のアラメやカジメが海藻の林を形成し、サザエ類の恰好の生息場とし

て機能している。また2~4mの長さのホンダワラ類がよく繁茂するガラモ場は、岩礁域を中心に比較的浅い場所にも多く見られる。冬から春にかけてはワカメがいたるところで生育している。隠岐諸島では梶村が深所（水深60m付近まで）のドレッジ調査を中心として詳細に海藻相を調査しており、クロシオメ（深海性コンブ）、ヒナカサノリなど十余種の新種が数多く確認されたほか、隠岐諸島はカジメの日本海側の分布北限となっている。また近年の生息調査ではパッチ状に分布していたアマモ場の中ではホソエガサ（環境省絶滅危惧Ⅰ類）も見つかっている。隠岐諸島は絶海の中にあり、日本海南部域においての海藻をはじめ海洋生物の分布上、最も興味ある区域といえる。

本県には、全国でも数力所しか生育が確認されていない貴重な海藻が認められる。海藻類の中では唯一、国の天然記念物に生育地が指定されているクロキツタと隠岐島が基準標本産地（タイプ産地）であるクロシオメがある。クロキツタは隠岐諸島の島前に位置する西ノ島の別府湾の近くに黒木御所跡（後醍醐天皇隠岐島に流刑された地）があり、この御所の前の海で珍しい海藻が採集され、その後この地名をとってクロキツタと命名された。1922年3月3日、国の天然記念物にその生息地が指定されている。クロキツタは隠岐諸島の中でも分布が限られており、広範な分布調査を行う必要があると思われるが、現時点で生育している周辺海域に、クロキツタの繁殖が拡大する傾向はないように思える。従って、現在生育している地域の保護が必要であると考え。クロシオメは隠岐諸島の島後・島前地区の水深20~60mの深所に生息しているので、その生態系は謎に包まれている。

（秋吉英雄）

海藻類（藻類）掲載種一覧

計2種

絶滅危惧Ⅱ類（VU）

●クロキツタ ○クロシオメ

計2種

【記号説明】

- ：カテゴリ区分変更なしの種（1種）
- ↑：上位のカテゴリ区分への変更種（0種）
- ↓：下位のカテゴリ区分への変更種（0種）
- ：新規掲載種（1種）
- ◇：情報不足からの変更種（0種）
- ◆：情報不足への変更種（0種）

【掲載順の準拠文献等】

原色日本海藻図鑑 保育社

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

緑藻植物門アオサ藻綱イワツタ目イワツタ科イワツタ属

クロキツタ

Caulerpa scalpelliformis (R.Brown ex Turner) C. Agardh var. *scalpelliformis*

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):秋吉英雄

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

隠岐諸島西ノ島の黒木御所跡近くの浅海で日本で最初に発見され、それにちなんでクロキツタと命名された。海藻類としては唯一、国の天然記念物に生息地域が指定されている(1922年)。島根県以外では愛媛県と高知県に分布をみるのみで、南西諸島にはアマミノクロキツタがある。隠岐諸島においても分布は限られており、潮流と海底質との微妙なバランスの上で繁殖しているものと思われ、防波堤の建設などによる海水の汚濁によって生息地域が減少傾向にあると思われる。

概要

体は匍匐する円柱状の茎状部と下方に繊維状の仮根を認める。匍匐枝の上方には、幅1~2cm、高さ10~20cmの緑色の平たいリボン状の葉状部が分岐しないで直立している。葉状部の縁は鋸のようなギザギザの切れ込みがあるのが特徴である。

参考文献

秋吉英雄・井上明日香・幸塚久則(2005) 島根県隠岐島・島前におけるクロキツタ*Caulerpa scalpelliformis* var. *intermedia*の生育状況について、*Caulerpa scalpelliformis* var. *intermedia*の生育状況について、ホシザキグリーン財団研究報告, 8: 197-201。
梶村光男(1968) 天然記念物隠岐島産クロキツタの成熟季節について、*藻類*, 16: 38-43。
Kajimura M(1969) On ecology of *Caulerpa scalpelliformis* var. *denticulate* in the Oki Islands, *Memoirs of the Faculty of Literature and Science, Shimane University, Natural Sciences*, 2: 81-98。
内村真之・Etienne Jean Faye・幸塚久則・新井章吾(2006) 隠岐沿岸における国指定天然記念物クロキツタ*Caulerpa scalpelliformis* (R.Brown ex Turner) C. Agardh (Caulerpaceae, Chlorophyta)の生育分布について、ホシザキグリーン財団研究報告, 9: 215-225。

県内での生育地域・生育環境

隠岐諸島でのみ生息が確認されている。天然記念物の地域保護指定地になっている隠岐島西ノ島の別府湾、中ノ島海士町菱浦湾周辺では広範囲に繁殖している。生息環境は実に様々で、砂礫質の浅い海底2mでは、砂に埋まっている岩上を中心として砂地上に匍匐枝を伸ばして、直径2~3mのコロニーを形成していたが、防波堤のコンクリート面や船の係留ロープ、直径50cmほどの転石上にも集団を作っており、水深30cmから20mの深さの冬場の波の影響を受けにくい場所で繁殖しているものと思われる。

存続を脅かす原因

沿岸域の堤防の設置や埋め立て、港湾浚渫作業等の海事工事などの漁港の整備・拡張に伴う生息環境の破壊が懸念される。生活排水などの流出による海水の汚濁。油汚染や漂着物による生息環境の悪化。

(執筆者: 秋吉 英雄)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

黄藻植物門褐藻綱コンブ目ネコアシコンブ科クロシオメ属

クロシオメ

Streptophyllopsis kuroshioensis (Segawa) Kajimura

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):林裕一(岡部株応用藻類学研究所)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

この海藻は梶村によって初めて隠岐島で報告されたが(1981)、ドレッジ採集を中心として得られた知見で生息環境は不明な点が多かった。近年、隠岐諸島中ノ島の岡部株応用藻類学研究所によって深度の潜水調査が行われ、生息環境の概要が少しずつ明らかとなってきた。島根県以外では静岡県伊豆海域に分布をみるのみで、伊豆半島でも深所に生育しているクロシオメは希少種であり、イセエビ漁の刺し網で混獲されることがある程度で、現場での生育は確認できてない。隠岐島においても分布は非常に限られていると考えており、潮流と海底質との微妙なバランスの上で繁殖しているものと思われ、生息環境の解明は急務である。

概要

葉状部は倒卵形で傾臥し、1年生の季節的な消失をする。多年生の分岐する匍匐部と仮根を持ち、短尺な匍匐部の分岐は数回で水平方向の広がりは殆どない。葉状部の長さは20~30cm、茎とのつけ根の部分が強く曲がる。

県内での生育地域・生育環境

隠岐諸島でのみ生息が確認されている。水深20から60mの深海に産するも

参考文献

Kajimura M(1981) *Streptophyllopsis* a new genus of Laminariaceae, Phaeophyta, from Japan, *Memoirs of the Faculty of Literature and Science, Shimane University, Natural Sciences*, 15: 75-87。
Kajimura M(1983) Development of *Streptophyllopsis kuroshioensis* (SEGAWA) KAJIMURA (Phaeophyta, Laminariaceae) in culture, *Memoirs of the Faculty of Literature and Science, Shimane University, Natural Sciences*, 17: 71-80。
Kajimura, M. 1983. On the regeneration of annual blade in *Streptophyllopsis kuroshioensis* (Segawa) Kajimura (Phaeophyta, Laminariaceae) from the Oki Islands, *Memoirs of Natural and Cultural Researches of the San-in Region*, 23: 9-13。
環境省自然環境局生物多様性センター(2001) 海域自然環境保全基礎調査 重要沿岸域生物調査報告書 7.静岡県田牛瀬場 84pp.

ので、これまでに知夫里島、島後地区の都万、津戸ではドレッジを主体とした調査で確認されている。中ノ島における生息は現在のところ深度潜水調査が進行中である。今後の調査次第では生息地域が拡大する可能性が多である。生息場は外洋の深所に局所的に見られ、海底地形によって形成される遮蔽区域に群生する状況などから探索し難く、生息環境は不明な点が多い。沿岸近くより沖側の外洋域に周年を通して藻体の分布密度が高い状況から水深60mまでの深部に生育し易いものと思われる。

存続を脅かす原因

隠岐諸島は、日本海特有の海洋現象がこの海域に生息する生物に与える影響は非常に大きい。南からの対馬暖流と北からのリマン寒流の勢いの強弱による海水温度変化、冬の季節風の吹き出しによる深海の冷水湧流の影響など、不安定な環境の中で、常に生息が脅かされるギリギリの状況の中で生き続けていると思われる。

特記事項

隠岐島津戸が基準標本産地(タイプ産地)である。

(執筆者: 秋吉 英雄)